

「法社会学」における形式合理性和実質合理性

千葉 芳 夫

〔抄 録〕

形式合理性および実質合理性の概念は、ヴェーバーの合理性概念としてよく知られている。だが、「法社会学」と「経済行為の社会学的基礎範疇」とでは、両概念の意味づけが異なり、また、「法社会学」では「形式的」に当たる語として formal と formell, 「実質的」に当たるものとして material と materiell が用いられている。これまで、こうした点については十分な考察がなされておらず、それゆえ、両概念の一般的な理解も正確なものとは言い難い状態にある。

この論考では, formal, formell, material, materiell の意味の違いを考察し, それを通して, 「法社会学」における形式合理性・実質合理性概念のより正確な解釈を提示した。

キーワード M. ヴェーバー, 法社会学, 形式合理性和実質合理性,
formal と formell ・ material と materiell

はじめに

形式合理性および実質合理性の概念は、ヴェーバーの合理性概念としてよく知られている。有斐閣の『新社会学辞典』では、「ある特定の価値観点を設定し、その達成の度合をさすのが実質合理性概念であるのに対し、特定の価値や内容とは全く無関係に行為や思考の経過が技術的に正確に計算される程度を意味するのが形式合理性である。…さらにヴェーバーは、形式合理性和実質合理性の乖離を近代社会の根本的な問題性として提示している」と説明されている(365頁)。弘文堂の『社会学事典』や有斐閣の『社会学小辞典』でも、ほぼ同じ内容の説明がされている⁽¹⁾。

形式合理性および実質合理性の概念が重要な役割を果たしているのは、『経済と社会』に収められている「経済行為の社会学的基礎範疇」(以下では、「基礎範疇」と略記する)と「法社会学」においてである。だが、両論文には、かなりの違いが認められる⁽²⁾。

「法社会学」では、二つの合理性は対立するものとされているが、「基礎範疇」では、両者は、原理的には対立するが、経験的には一致する場合も少なくない、とされ、さらには、「理論的な、したがって当然まったく非現実的な前提のもとで構成された可能性にしたがえば、両者は常に一致する」とさえ述べられている(S.59,360頁)。

また、「基礎範疇」では, formal, material の語が一貫して用いられているのに対して, 「法

社会学」では、それだけではなく、formell, materiell という語も用いられている。formal と formell, material と materiell の用語の違いは、これまであまり問題にされることがなかった。これについて中野は、「ヴェーバーは、その定義からして二つの概念を明確に区別」しているのだから、それを見逃したのは、「これまでの研究の意外な盲点」だと言っている（43 頁）。

この論考では、まず、formal と formell, material と materiell との違いに論究している数少ない論者である、シュルフターと中野の解釈を検討することから始めることにしよう。

1. シュルフターと中野の解釈

formell と materiell の区別について、シュルフターは、次のように解釈している。「formell は法形式、つまり『手続き』に関係し、materiell は法内容つまり、法の『目的』に関係している」（S.130,125 頁）。さらに彼は、「全て形式的な法（formales Recht）は、formell には少なくとも、相対的に合理的である」（RS.,S.396,104 頁）というヴェーバーの言葉を引き、「たんに法の formell な側面と materiell な側面が区別されるだけでなく、さらに、法創造と法発見の諸類型はそれが法のどの側面に優位を与えるかに応じて特徴づけられうる」とヴェーバーが考えているのだ、と解釈する（S.130,125 頁）。そして、形式的な法（formales Recht）とは、formell な成分によって支配されている法であり、これに対して、実質的な法（materiales Recht）とは materiell な成分によって支配されている法である、とする。言い換えるなら、形式的な法は、手続きが重要な意味を持ち、これに対して、実質的な法は、具体的な内容（条文）が重要な意味を持つ、ということである。

だが、この解釈は、少なくとも分かりにくいものである。formell な（つまり手続きの）合理性・合理化と「formell な成分によって支配されている法」の合理性・合理化とは、いったいどう違うのであろうか。さらに、それらは、formell な合理性と言うべきなのか、それとも formal な合理性と言うべきなのか。

さらに彼は、「ヴェーバーは… formal な合理化と material な合理化は互いにいわばアンチテーゼの関係にある、と主張した。法発展が進めば進むほど、formell な合理性と materiell な合理性はますます『相容れなく』なる」と言う（S.132,126 頁）。ここでは、formal と formell, material と materiell の区別は意味を失っている⁽³⁾。

シュルフターは、法の形式的構造原理と実質的構造原理とを区別している。形式的構造原理とは手続きの一般性、実質的構造原理とは法の原理、法規範の一貫性を意味する。そして、このような区別に基づき、「法発展の経過の中で一般的法規範が発生するという事実」を「実質的合理化」とヴェーバーが捉えている、としている（SS.134-5,130 頁）。だが（後に詳論するが）、ヴェーバーの「実質合理性」は倫理的、功利的、政治的など、とにかく法以外の規範が法的決定に影響を及ぼすことを意味している。とすれば、デューベルトも言うように、シュルフターの議論はヴェーバーの正確な解釈とは言えないものとなる（Döbert, R., SS.218-9）。

結局のところ、シュルフターの関心は、形式的（formal）—実質的（material）および合理—非合理的という軸を組み合わせ、彼なりの法の類型論・発展論を作ることであり、ヴェーバーの解釈それ自体には、さほど関心を払っていないのである⁽⁴⁾。

中野はシュルプターのこのような解釈が不十分なものだ、とした上で、次のような解釈を示している。

formell - materiell という対概念においては、「法の営みの合理性が、手続きについてなのか内容についてなのかが問題にされている。これに対して、formal - material という対概念は、いずれも、法的な決定の基準の性質を問題にしている」(44頁)。そして彼は、formell - materiell に「定式手続き的 (上)」—「内容的 (上)」という訳を当て、formal - material には「形式的」—「実質的」という訳を当てている (44-5頁)。

formal と material の区別は次のようである。「formal というのは、決定において準拠される基準が一義的・一般的なメルクマールをもって規定されているということ、この意味で『形式的』ということ」であり、「これに対して、material というのは、決定において準拠される基準が実質的な価値規範であるということである」(45頁)。

formell と materiell の解釈は、シュルプターとほぼ同じであるが、formal - material の解釈は異なる。formal と formell, material と materiell との意味の違いは、シュルプターの場合よりも明瞭であるし、ヴェーバーの論述にもあっているように思われる。だが、中野の解釈がそのまま受け入れられるかという点、そうではない。

2. 形式的な法 (formales Recht) の概念

ヴェーバー自身の議論を見てみよう。彼は、「全て形式的な法は、形式的には少なくとも、相対的に合理的である」と述べた後で、「ある法が形式的 (formal) であるというのは、実体法上も訴訟上も (materiell-rechtlich und prozessual)、もっぱら一義的で一般的な要件メルクマールのみが尊重されるということである」と述べている (S.396,104頁)。この一義的で一般的なメルクマールにも二種類が区別される。一つは、感覚的に直感的な性格をもつ外面的なメルクマールであり、もう一つは、論理的な意味解明＝論理的合理性である。

そして、後者の場合、「実質合理性 (materiale Rationalität) との対立はむしろ高められる」とされる。なぜならば、実質合理性が意味しているのは、「抽象的な意味解明の論理的な一般化ではなくて、それとはちがった性質の権威をもつ規範 (倫理的な命令、功利的またはその他の合目的性の規則、政治的格率など) が、法律問題の決定に対して影響力をもつべきであるということだからである」(S.397,105頁)。

この「形式的な法」の説明では、「形式的 (formal)」という語は、一義性・一般性をもつという意味で用いられているように思われる。だが、それだけであれば、実質合理性との対立は成立しない。なぜならば、倫理的な命令も、政治的格率も、それなりの一義性・一般性をもちうるからである。ヴェーバーにとって、「個々のケースの全く具体的な価値評価……」が、決定のための基準とされ、一般的な規範が基準とされないような場合は、実質的に (materiell) 非合理的である、とされていることから分かるように、一般性がないことは、非合理的であることを意味する (S.396,104頁)。実質合理性が形式的な法の合理性と対立するのは、(ヴェーバー自身の説明とは違って) それが一義性・一般性を欠くからではない、と考

えなければならないのである。

このことは、formal と対立的に用いられている material という語の意味を検討すれば明らかになる。この語が、material な諸原理、諸要求、というような用い方をされているケースのいくつかを引用してみよう。

「統治の特徴的な固有の本質は、…それがまさに、現行の客観法を…尊重し・実現することだけをその目的としているのではなく、他の実質的な（material）諸目的——政治的・倫理的・功利的あるいはいかなる性質の目的であれ——の実現をその目的としている、という点にある」（S.389,72-3 頁）。

近代国家における「司法の分野においては、今日の裁判官は、…実質的な（material）諸原則、すなわち倫理・衡平・合目的性にしがって決定を下すように、期待されることが希ではない」（S.389,73 頁）。

「一般的に言えば、教権制の支配者の『合理主義』も家産君主の『合理主義』も、ともに実質的な（material）性格をもつものである…。彼らが求めたのは、形式的（formal）＝法学的に最も厳密な・チャンスの計算可能性と法や訴訟の合理的体系化とにとって最善の・〔法の〕あり方ではなくて、これらの諸権威の実用的＝功利的な・また倫理的な諸要求に最も適合的な〔法の〕あり方なのである」（S.468,377 頁）。

「家父長制的裁判が、確定した諸原則を遵守するという意味で合理的であるということは、事実上十分にありうることである。しかし、それがこの意味での合理性をもっている場合にも、このことは、その法的な思考手段が論理的な合理性をもっているという意味ではなくて、むしろ社会秩序の実質的な（material）諸原理——それが政治的内容のものであれ、福祉功利的または倫理的内容のものであれ——が追求されているということを意味しているにすぎない」（S.486,444 頁）。

暴利取締法や、対価が釣り合わないという理由から契約を無効としてとり扱おうとする試みは、「法的・習律的または伝統的な性格をもたず・純粹に倫理的な性格をもった規範に、つまり形式的な（formal）合法性の代わりに実質的な（material）正義を求めるような規範に、立脚しているのである」（S.507,515-6 頁）。

このように、material という語は、政治的、倫理的、功利的、あるいは社会的正義など、いずれにせよ、法的ではない規範・原理に基づく、という意味を含んでいるのである。とすれば、formal であるということは、単なる論理的な一般性ではなく、法の論理が貫徹していることだ、と解釈せざるをえない。このように解釈するならば、「形式合理性」とは、法の論理・原理のみに基づいて法が作られ運用されるということを意味することになる。そうであれば、中野の解釈も不十分なものと言わざるをえないであろう。

3. 法の形式性の二義

だが、formal という語は、常にこのような意味で用いられているわけではない。それは、形式を重んじる、というごく通常の意味でも用いられている。

ヴェーバーによれば、原始的なあるいは始原的な法は、呪術と結びついており「呪術に由来する形式主義と啓示に由来する非合理性との結合形態」であった (S.504,509 頁)。

「この種の (相争うジッペ相互間の・訴訟手段として神託や神判を伴う・贖罪および仲裁手続の) 訴訟手続きは、呪術的または神的な力に呼びかけるあらゆる活動がそうであるように、厳密に形式的で (formal) あり、決定的な訴訟手段の非合理的・超自然的性格を通じて、実質的に (material) 『正しい』判決を獲得することを期待していたのである」 (S.470,381 頁)。

「呪術が、紛争のあらゆる解決に、また新たな規範のあらゆる創造に介在している結果、あらゆる原始的な法手続に特徴的にみられる厳に形式的な (formal) 性格が生まれてくることになる。というのは、問いが形式的に (formal) 正しく提起されている場合においてのみ、呪術的手段は正しい回答を与えるからである」 (S.403,287 頁)。

また、始原的状态を脱した「身分制的な裁判や法創造」においても、「法秩序は、たしかに厳格に形式的 (formal) ではあるが、しかしまったく具体的であり、この意味において非合理的である」 (S.485,443 頁)。

これらの場合、「形式的」という語は、先の「形式的な法」の場合とは違って、論理的な一般性ではなく、主に手続きの一貫性を意味している。そして、それは合理性を意味するものではなく、むしろこのような法は非合理的だとされている。このことから、形式的であることが、そのまま合理性を意味するのではない、ということは明らかであろう。「形式」が手続き面をさし、その一般性が合理性の基準だ、というシュルプターの解釈はあてはまらない、ということになる。それに、そもそも、神託などの「理性的にコントロールしようとする手段以外の手段が用いられる場合」は formell に非合理的である、とされているのであり、その手続きがいかに形式的に一貫していても、それは非合理的なのである。

さらに、このような意味で形式的な法は、同時にまた、非形式的 (unformal) あるいは反形式的 (antiformal) であるとも言われている。

ヴェーバーは法の発展の初期段階において、神聖な命令と世俗的な法との分離が起こらない場合には、「倫理的義務と法的義務、倫理的訓戒と法的命令とが——形式的に (formal) 峻別されることなく——相互に曖昧に入り交じった状態が、換言すればすぐれて非形式的な (unformal) 法が成立した」と述べている (S.469,378 頁)。つまり、始原的な、呪術と混じり合った法は、手続きのきにはきわめて「形式的」ではあるが、法全体の性質からすれば「非形式的」だ、と言われているのである。

もちろん、このような法は、手続きが厳密に遵守される、という意味では、「形式的」である。だから、それが「非形式的」だと言われるのは、法の原理的・論理的一貫性という意味での「形式性」に対立するからだ、と解釈しなければならない。

法が非形式的であるのは、このような始原的な段階においてばかりではない。「家父長制的行政のこのような反形式的 (antiformal) ・実質的な (material) 性格がその頂点に達するのは、(世俗的または祭司的な) 君主が、真に宗教的な利益に奉仕するという場合である」 (S.487,446 頁) というように、実質的な法は、同時に反形式的とされている。

明らかに、「非形式的」あるいは「反形式的」という語は、法以外の規範や原理が法にもち込まれ、法の原理とそれ以外の規範原理とが混在している状態を意味している。

これまでの議論から formal に二つの異なった意味が含まれていることは明らかになったであろう。まず第一に、それは定められた法やその手続きを遵守するという、ごく通常の意味で用いられている。

これに対して、最初にあげた「形式的な法」の場合の「形式性」は、これとはまったく異なる意味だと解釈しなければ、ヴェーバーの議論が理解できなくなる。そして、この場合の formal は、すでに何度か述べたように、法が法の規範・原理のみに基づいていることを意味しているのである。だからこそ、第一の意味において形式的である場合にも、法の目的や決定の基準に関して material である場合には、非形式的あるいは反形式的だと言われるのである。

formal をこのように理解すれば、material や unformal（あるいは antiformal）の意味も明らかになる。material も unformal もどちらも法の領域に法以外の規範原理が持ち込まれている状態を意味している。そして、他の規範原理に基づいているという性質に焦点が置かれる場合には、法は material だ、ということになり、法と他の規範原理が混在し、法の原理が貫徹していないという状態を指すときには、unformal あるいは antiformal だ、と言われるのである。

では、formell はどうであろうか。それは常に「手続き的」という意味で用いられているだろうか。

中野は、「法社会学」第一節末尾と第二節冒頭の部分を引用し、「定式手続き上の（formell）仕方に様々な影響を与えてきた諸力の意義を問う」ことがこの論文の問題視角であったと言う（47 頁）。引用されている箇所をもう一度引用しておこう。

「さて、そこでわれわれは、法の形成に参与した諸力が、法の定式手続き上の性質（formelle Qualitäten）の展開に対してどのように影響を与えたかを見てゆくことにしよう」（中野、45 頁、RS,S.397）。

「…この事態は、法が利害関係者の利害とりわけ経済的利害にどのように奉仕するかという定式手続き上のその仕方（die formelle Art）に特徴を表している」（同所）。

だが、最初の引用文のすぐ後で、ヴェーバーは次のように述べているのである。

「われわれは、法的思考のこれらの諸要請についてはここではさしあたりまったく立ち入らないで、法の機能の仕方について重要な意味をもっている・法の若干の一般的な形式的な（formal）諸性質について検討してみたいと思う」（S.397,106 頁）。

中野が言うように、ヴェーバーが formal と formell を明確に区別しているのだとしたら、ここでヴェーバーは、「定式手続き」を考察の中心に置く、と述べたすぐ後で、今度は、「法的決定の基準」を中心とする、と言っていることになる。これでは、ヴェーバーは混乱していると考えざるはかなくなってしまう。

素直に読めば、ここでの formell と formal を意味上区別するのは困難である。ヴェーバーは、実はこれらの用語をそれほど明確には区別していないのではないか。そう考える方が自然であろう⁽⁵⁾。

4. 用語の混乱

ここで、もう一度、ヴェーバー自身の議論に立ち戻ることにして。「法社会学」中のよく知られている箇所では、彼は法創造と法発見とは、合理的であることも、非合理的であることもある、と述べている (SS.396-7,104-5 頁)。

まず, formell および materiell に非合理的である場合があげられ、つぎに、合理的である場合にも、「formell な観点から合理的であることもあり, materiell な観点から合理的であることもある」と言われる。そして、それに続いて、formell な観点から合理的な法が、(materiell でなく) material な合理性と対立することになる、と述べられるのである。

この箇所の用語法は、明らかに奇妙である。formell な合理性と非合理性, materiell な合理性と非合理性について述べていたはずなのに、materiell な合理性についての説明はなく、formell な合理性と material な合理性との対立が述べられ、material な合理性についての説明が後に続く。これは、ヴェーバーに用語上の混乱があることを示すのではないか。

もう少し詳しくヴェーバーの議論を追ってみよう。まず, formell に非合理的な場合として、「法創造と法発見の問題とを規整するために、理性的にコントロールするような手段以外の手段が用いられる場合、例えば神託やあるいはそれに代わるようなものを求めるということがおこなわれる場合」があげられる。ところが formell に合理的な場合の説明では、「全て formal な法は、formell には少なくとも、相対的に合理的である」と述べられた後、法が形式的である (formal) ということの説明が続く。formell な合理性の説明は、それ自体としてはおこなわれないまま、formal な法の説明へと移行しているわけである。そして、それが material な合理性と対立することになる、と述べられることになる。

このように、formell な合理性と非合理性, materiell な合理性と非合理性とが説明されるはずの、決定的に重要な箇所において、formell, materiell から formal, material への概念の横滑りが起こっているのである。

こうしたことを考えるならば、ヴェーバーの用語法は混乱している、と見る方が彼の議論を正しく解釈できるのではないだろうか。

先に見たように、formal が二重の意味を持っていたように、formell も「(法) 手続き的」という意味と一般的な「形式的」という意味との二つの意味で使われているのである。ヴェーバーが「法社会学」において法の formell な性質を検討すると言ったり、formal な性質と言ったりしているのは (中野の解釈とは違って)、どちらも、単に「形式的な」性質を検討するという意味にとるべきであろう。ここで「形式的」というのは、法の具体的な内容にまでは立ち入らない、という程度の意味である。(だが、この「形式的」な側面の内には、法が「形式合理性」に向かうか「実質合理性」に向かうかという重要な問題も含まれている。)

このような解釈が成り立つとすれば、ヴェーバーは formal を「法の規範・原理だけに基づく」という意味と、一般的な「形式的」という意味で用い、formell を「(法) 手続き的」という意味と、これまた一般的な「形式的」という意味とで用いていることになる。

こうした混乱の理由は、次のように考えられよう。

ヴェーバーが「法社会学」において formell, materiell という語を用いているのは、

formelles Recht（手続き法・訴訟法）および materielles Recht（実体法）という法的な用語があるからである。シュルプターが formell を法の手続きに関連するもの、また materiell を内容に関連するもの、とするのもこのことによるのであろう。

だが、興味深いことに、ヴェーバーは、materielles Recht という語は何度も用いているが、formelles Recht という語は用いず、Prozeßrecht を用いている。これは、formales Recht との混乱を避けるためだと考えられる。そしてそれは、「法社会学」において formales Recht がこれまで見てきたような極めて特殊な意味で用いられているからに他ならない⁽⁶⁾。

しかし、彼はこのように formell, formal という語を法学的な特殊な意味で用いるとともに、両語を一般的な「形式的」という意味でも用いている。このことが「法社会学」の用語法に——またその解釈に——混乱をもたらすことになったのである。

5. 「法社会学」の再解釈

formal, formell, material, materiell をこのように解釈した場合、「法社会学」におけるヴェーバーの議論から何が見えてくるだろうか。

まず、「形式合理性（formale Rationalität）」も「実質合理性（materiale Rationalität）」も、何か一般的な合理性として捉えられているわけではなく、法の領域に限定された、この意味で極めて狭い合理性概念だということである。すでに見てきたとおり、前者は法が法の原理・論理のみによって成り立つことを意味し、後者は本来法的になされるべき決定が、法以外の原理に基づいてなされることを意味している。つまり、両合理性を区別する基準は、法の原理・論理のみか、それ以外の原理なのか、ということにある。とすれば、両者が対立するもの、当然のこととなる。実質合理性を一般的に何らかの価値観点や規範と合致していることと解釈してしまうと——価値観点、規範の内には法的なそれも含まれるのであるから——、形式合理性の解釈も誤ったものとならざるをえないのである。

このように解釈することによって、何度か出てきた「全て formal な法は、formell には少なくとも、相対的に合理的である」という謎のような言葉の意味も明らかとなる。つまりそれは、法の原理・論理のみに基づいて成り立っている法は、手続き的にも——当然、「理性的にコントロールしうるような手段以外の手段」などは用いないのであるから——合理的だということの意味しているのである。

では、形式合理性を法の領域からより一般化して捉えればどうなるであろうか。「非形式的」な法とは、法の原理とそれ以外の原理とが混在している状態を指していた。逆に言えば、形式合理性とは、相異なる原理を区別し、原理的一貫性を求める、ということの意味することになる。法と宗教や倫理や政治との原理的区別だけではなく、ヴェーバーが方法論において強調した、「事実判断」と「価値判断」の区別も形式合理性の一形態だ、と言えるであろう。

また、それを制度やシステムの視角から捉えることもできよう。法が形式合理化されるということは、専門的な教育を受けた法の専門家（裁判官や弁護士など）のみによって、その制度が運営されることを意味する⁽⁷⁾。これは、始原状態においては呪術と分かちがたく結びついていたそれぞれのシステム領域が個別のシステム領域として自立していくことだと解す

ることもできる。これを「職業としての学問」に出てくる「主知主義的合理化」とは別の「脱呪術化」の意味だ、と考えることもできよう。

6. 法の歴史的発展傾向

中野もこうした法の分立化、自立化に着目している。彼はそれを『物象化』と『世俗化』という二つの軸の交錯の結果と捉え(74頁)、「法秩序が自立し法的合理主義に導かれて体系を志向してゆく、法技術的な発展のすえにたどりついたこの特質こそ、ウェーバーの見るところ、近代法秩序の宿命的な構成原理に他ならない」と言う(94頁)。

だがここには、形式合理性を「官僚制の鉄の檻」として現象するものとして捉える、しばしば見られる解釈が影響を及ぼしているように思われる⁽⁸⁾。はたして、ヴェーバーは「法社会学」においてそのようなことを主張しようとしているだろうか。

法の「形式的合理化」は、法の論理が確立・貫徹していくこと、つまり、法が法として純化されてゆくことを意味するのであるから、法の内在的発展だと言えよう。だが、ヴェーバーが「法社会学」で関心をもっているのは、法の内在的発展ではなく、むしろ、外部からの影響である。つまり、「法の形成に参加した諸力が、法の形式的性質の展開に対してどのように影響したか」(S.397,106頁)、特に、「政治的支配形態が法の形式的性質に対してどのような影響を与えるか」(S.468,376頁)という問題である。

ヴェーバーは、法の一般的発展段階を次のようにまとめている(S.504,509頁)。まず、「『法予言者』がカリスマ的に法を啓示する段階」、ついで「法名望家が経験的に法を創造し法を発見する段階」、次に、「世俗的なインペリウムや神政政治的な諸権力が法を指令する段階」、そして最後に、「専門法律家が、体系的な法の制定をおこない、…専門的な『裁判』をおこなう段階」に至る。その過程は、「法の形式的な諸性質」という観点から見れば、次のようになる。「すなわち、それは、原始的な訴訟における・呪術に由来する形式主義と啓示に由来する非合理性との結合形態から、時としては神政政治や家産制に由来する実質的で(material)非形式的な(unformal)目的合理性の迂路を経て、ますます専門化してゆく法学的な——したがって論理的な——合理性と体系化との段階に、それ故にまた、——…——法の論理的な純化と演繹的な厳格さがますます強化され・訴訟の技術がますます合理化される段階に到達する」。最後の段階では、「法学教育を受けた」法の専門家が、「文献的で形式的(formal)・論理的な訓練にもとづいて」裁判を行うのである。

法の発展に影響を及ぼした外部の諸力は、まずは呪術であった。始原的には法は呪術と混在した、「非形式的」なものであった。次に、宗教的権力や政治権力が出てくる。この段階では、法的決定は法の原理にしたがうのではなく、それ以外の「実質的」な基準に基づいて行われることになる。そして最後に現れるのが、市民的な経済的利害関係者である。彼らの登場とともに、法の「計算可能性」が重要な意味を持つようになる。

市民的な利害関係者は、「契約の法的拘束力を確実に保障するような、一義的で明確な法を、すなわち、これらすべての性質を備えることによって計算可能な形で機能するような法を、要求せざるをえない」(S.487,448頁)。

また、「財貨市場の利害関係者たちにとっては、法の合理化と体系化とは、一般的にいつて、…裁判の機能の計算可能性が増大してくることを意味していた——この計算可能性は、経済的な永続経営、とりわけ資本主義的な永続経営の最も重要な前提条件の一つであり、これらの永続経営は、事実、法的な『取引の安全』を必要としているのである」（S.505,512頁）。

「計算可能な」法は、当然、「形式的な」法である。「市民的諸階層は、一般的には、合理的な法実務がおこなわれることに対して、したがってまた体系化された・一義的な・目的合理的に創造された形式的な（formal）法——伝統への拘束も恣意をもひとしく排除し、したがって主観的権利をもっぱら客観的な規範だけを源泉として成立させるような形式的な（formal）法——に対して、最も強い関心を示すのが常である」（S.471,384頁）。

このような市民層の要求と、特権的階層に対抗しようとする君主の利害、および彼の官吏の利害とが結びつくことによって法の形式的合理化（formale Rechtsrationalisierung）が推し進められ（S.487,448頁）、体系的で計算可能な法が現れてくることになる。

ところで、西洋においては、形式的なローマ法が影響を与え続けた。「西洋の家産君主の裁判が、他の地域とちがって、真正家父長制の福祉政策や実質的な（material）正義政策の道に合流しなかったのも、これらの形式的な（formal）諸性質があったためである」（SS.491-2,465頁）。そして、ローマ法の継受は、「文献的な法教育を受け、大学の与えるドクトル資格免許を取得した法学者たちを作り出した」。かれらは、「法とは、それ自体の中に論理的な矛盾や欠缺を含まない一つの完結的な『規範』複合体であり、これらの規範を『適用』しさえすればよいのだという」「今日支配的な法の見方」を生み出すに至る（S.493,468頁）。

だが、こうした法のより一層の論理的一般化については、次のように言われている。「しかしながら、このような特殊の仕方での法の論理化には、形式的な（formal）法それ自体への傾向の場合とはちがって、生活上の諸要求——例えば市民的利益関係者の『計算可能な』法を求める要求——は、決して決定的な形では、関与していなかった。けだし、この種の要求〔…〕は、あらゆる経験の示すように、先例に拘束された形式的で（formal）経験的な法によっても、まったく同じようによく、しかもしばしば一層よく満足されうるからである」（S.493,468頁）。

ここでは、法の論理的一般化と形式的な法とが、別のものであるかのごとく論じられている。だが、初めの方にてできた「形式的な法」の説明では、論理的一般性（論理的合理性）は法が形式的であることを意味する、「一義的で一般的なメルクマール」の一つの種類であったはずである。

ヴェーバーは、このあたりでは、「形式的な法」を計算可能な法とほぼ同義なものとして捉えているように思われる。法の発展を始原状態から歴史的に追うのではなく、近代社会のあり方という観点から見た場合、重要になるのは、法の法としての純化よりも計算可能性だ、ということであろうか。ここには、「形式合理性」を計算可能性とする「基礎範疇」に近い意味が現れているのである。

7. 形式的な法の実質的な法への転化

先にあげた法の一般的発展段階を見れば、法の形式合理性は、徐々に高まっていくもののように思える。ラッシュは、実質合理性を前近代のものとしているが (Lash, S., p.371), そこまでは言わなくても、少なくとも、近代以降、形式合理性が優越するようになる、という解釈はかなり一般的なものになっているように思われる。だが、ヴェーバーは形式的な法の実質的な法への転化について繰り返し述べているのである。

まず第一は、形式的な自然法の実質的な自然法への転化である。個人の基本的平等に基礎をおく、「契約自由の形式的・合理的な自然法」は、社会主義理論の影響によって「労働による収益のみが正当性をもつという」「実質的な自然法」へと転化していく (S.500,494 頁)。

現在では、形式的であれ実質的であれ、自然法的公理論は力を失った、とヴェーバーは言う。「それは、一つには法学的な合理主義そのものと、一つには近代的な主知主義一般の懐疑的精神とによって、あらゆる超法律的な諸公理論一般が、ますます崩壊と相対化とをとげていった、ということの結果であった」 (S.502,501 頁)。

だが、一方で、現代においては、法学的な合理主義の展開そのものが、法の形式的な性質と対立するようになっている。

「法思考が論理的にますます純化されていくということは、…外面的に明瞭な形式的な (formal) メルクマールに固執することをやめて、——…——論理的な意味説明が強化されることを意味している」。この意味説明は、当事者の「真の意思」や「心情」を重視するという「心情倫理的合理化 (gesinnungsethische Rationalisierung)」に向かう (SS.505-6,513 頁)。

「法社会学」の末尾近くで、ヴェーバーは次のように述べるに至る。「法の形式的な (formell) 諸性質の発展は、独特の対立的な諸特徴を示している。法は、営業上の取引の安定性がそれを要求するかぎりでは、厳に形式主義的であり、感覚的な要件に縛られていながら、他方、当事者意思の論理的な意味解釈や『倫理的最小限』の意味での『善良な取引慣習』がそれを要求するかぎりでは、営業的な取引上の誠実のために、非形式的 (unformal) なものになる」 (S.512,534 頁)。現代において、前近代と同様の法の非形式性が回帰するのである。

ここで述べられていることは、形式的合理化がそれ自体として貫徹するのではなく、それが行き着いたところで、実質的な要因 (実質合理性) を必要とするようになる、ということだと解釈することができる。つまり、形式合理性 (特に論理的合理性という意味での) が実質合理性と対立するようになる、という最初の方に出てきた主張と逆のことが言われていることになる。

これは、ヴェーバーが、法が法の原理自体によっては根拠づけられない、と考えていることによるのであろう。(そしてそれは、「社会学の根本概念」などにおいて、法をその原理によって他の規範と区別するのではなく、強制装置の存在によって区別する、ということにつながっている。) 法の形式的合理化とは、法の原理・論理が貫徹し、法が法として純化されていくことだ、と本稿では解釈してきた。だが、法が自らの内に根拠をもたないのであれば、形式的合理化は必然的に限界に突き当たることになる。それも、形式的合理化＝論理的合理化そのものの展開の帰結として、それが起こるのである。

これは、ある領域の原理的・論理的深化が進めば進むほど、そのこと自体が自らの根拠を掘り崩してしまう、ということである。そしてそれは、学問の進歩が学問そのものの意義を失わせてしまう（少なくとも、自らはそれを基礎づけることができなくなる）、という「職業としての学問」で主張される事柄と同様のものである。

そして、「法社会学」に限って言うならば、それは「形式合理性」の概念に矛盾を引き起こす。法が独自の根拠を持たないのならば、法が法として独立し、純化されるということも究極的にはあり得ないこととなるからである。

「法社会学」が結局草稿のままで残されてしまった理由も、一つにはここにあるように思われる。そして、約十年後に、「基礎範疇」において、ヴェーバーは「法社会学」とは全く異なった「形式合理性」の概念に辿りついたのである。

〔注〕

- (1) また、ブラベイカーも形式合理性が手段と手続きの計算可能性に関わり、実質合理性は目標または結果の価値に関わると解釈している（Brubaker, R., p.36）。
- (2) 同じ『経済と社会』に収められてはいるが、両論文の執筆時期には十年ほどの開きがあると考えられており、また、第二部の「法社会学」は草稿のままで遺されていたものであった。
- (3) シュルフターは、formell, materiell を「合理性（Rationalität）」を修飾する語として、formal, material を「合理化（Rationalisierung）」を修飾する語として用いる、という区別をしているようであるが、この用語法は、ヴェーバーのものとは一致しない。
- (4) シュルフターは、ヴェーバーの文を引用しながら、「materiell な合理性というのは、『倫理的命令ないし功利主義的その他の合目的性の規則、あるいは政治的格率等の、抽象的な意味解釈の論理的一般化とは異なる質的尊厳の諸規範が、法律問題の決定にも影響力をもつはずである』ということ」だとしている（S.132,127 頁）。だが、ヴェーバーの文章では、この箇所は、materiell な合理性ではなく、material な合理性（materiale Rationalität）である（S.397）。このことも、シュルフターがヴェーバーの用語法自体にはそれほど注意を払っていない、ということを示すものである。
- (5) また、次のような箇所もある。「すでにみたように、証明手段が始源的には——もともとは呪術的要因に制約されて——形式に（formal）拘束されていたのを打破したのは、一つには神政政治的合理主義、一つには家産制的合理主義——この両者はともに『実質的な真実の探求（materielle Wahrheitsermittlung）』を要請するものである——の仕事であり、要するに実質的合理化（materiale Rationalisierung）の産物であった」（S.505,512 頁）。ここでも、material と materiell が意味上の区別なく使われていることは明らかであろう。
- (6) それでは materielles Recht はなぜ、そのまま用いるのか、という問いが出てくるかもしれない。しかし、これはシュルフターも言うように、ヴェーバーの関心が主要には法の形式合理化・合理性に向けられており、実質合理性は残余的カテゴリーだからだ、と考えればいいであろう（SS.131-2,126 頁）。
- (7) それゆえ、イギリスの陪審員制は「非合理的」である、とされる（S.447,286）。
- (8) たとえば、最近では、リッツァーがこのような解釈をし、マクドナルド化＝形式合理化として捉えている。

〔引用文献〕

- Brubaker, R., *The Limits of Rationality*. George Allen & Unwin, 1984.
- Döbert, R., Max Webers Handlungstheorie und die Ebenen des Rationalitätskomplexes, in Weiß, J., Hg., *Max Weber heute*, Suhrkamp, 1989.
- Lash, S., Modernity or Modernism? Weber and Contemporary Social Theory, in Whimster, S. and Lash, S. eds., *Max Weber, Rationality and Modernity*. Allen & Unwin, 1987.
- 中野敏男, 『近代法システムと批判』, 弘文堂, 1993 年。
- Ritzer, G., *The McDonaldization Thesis, explorations and extentions*, Sage, 1998, 正岡寛司 監訳, 『マクド

- ナルド化の世界』, 早稲田大学出版部, 2001年。
- Schluchter, W., *Die Entwicklung des okzidentalens Rationalismus*. J.C.B.Mohr, 1979. 嘉目克彦訳, 『近代合理主義の成立』, 未来社, 1987年。
- Weber, M., Rechtssoziologie, in *Wirtschaft und Gesellschaft*. 5. rev. Auf., J.C.B.Mohr, 1972. 世良晃志郎訳, 『法社会学』, 創文社, 1974年。
- Ders., Soziologische Grundkategorien des Wirtschaftens. in *Wirtschaft und Gesellschaft*. 富永健一訳, 「経済行為の社会学的基礎範疇」, 尾高邦雄 責任編集 『世界の名著 61 ウェーバー』, 中央公論社, 1979年, 所収。

(ちば よしお 現代社会学科)

2006年5月10受理

